

りかい、

しうや りふかふ

「心配ない、誤解のされようもないし、理解のあり方もない。只唯、現実があるだけ」

天易真兮は髪を翻すかのように軽く首を振って長鬚を揺らし、そう言った。ウィザードハットに、大きなカフスのサテンのミリタリーロングコートといういつもの様式。

「幸福になりたい気持ちからは逃れられない。他のベクトルがない。韋中を好んで滅びるやつはそれに幸福を見出しているのさ。愛する者のために犠牲になるやつは愛する者を犠牲にするよりは、その方が幸せだからするのさ。

苦行をするやつも同じだ。やりたいことを堪えて大義に走るやつも。究竟を欣求すること」

乾いた無表情な声を途切れさせ、暫しキャラバッシュパイプを吹かしてから、ブルースハープを弄り、

「まあ、そこまで言つと、もはや幸福という言葉も若干適切ではないのかもしれないがね。別に改めて知る必要もないことだ。好むと好まざるど誰しもその生き方をし、知るとも知らぬとも、りかい」しているからだ。佛陀が解脱後に教えを説くことなく、入滅を計つたのもよくりかい」できる」

クラシック・ヨーロッパ調の喫茶店ウッドギターのヴェルベット張りの椅子に深々と腰掛けながら、平衡隆臥は白檀の香を楽しんでいる。半眼でぼんやり聴いていた。満腹で眠たげな老犬のようだ。

天平普蕭は濃茶と明るい茶と赤茶のペイズリー柄の、フランス革命時代のような太いタイを巻き、キューバ葉巻の紫煙を燻らせ、カストロを想う。長めのマッシュルームカットに尖った顎。ニヒリズムを湛えた微笑を泛べているが、意味はない。軽く恰好つけているだけの軽桃浮薄さを楽しんでいる。ボブ・ディランを口遊み。

狼髪に傍姿、木刀を突いてその柄に両手を乗せ、そこに顎を乗せていた癡之へ裂がやおら美濃焼の茶碗、たつぷりの釉薬に小孔貫入緋色のあらわれ、高台に土味滋味深いものに、清酒を注いで、グイッと呷る。蕭々たる雨情に鬱蒼と籠盛れ上がる緑の山が想い泛ぶ。

「うむ。大和は國の眞秀つば。

漢の高祖、劉邦の気分だぜ」

平成二十九年二月五日記す